

平成19年9月28日

## 第14回 関東産業衛生技術部会・研修会のご案内

関東産業衛生技術部会 田中茂（十文字学園女子大）

ホルムアルデヒドは、いわゆるシックハウス症候群との関連から、近年とくに注目を集めている化学物質である。これまで国際がん研究機関(IARC)は、ホルムアルデヒドをグループ2A(ヒトに対しておそらく発がん性がある)に分類してきたが、あらたな知見に基づき2004年6月、グループ1(ヒトに対して発がん性がある)とし、現在、日本産業衛生学会でも議論となっている物質である。

ホルムアルデヒド( $\text{CH}_2\text{O}$ , CAS No. 50-00-0)は、分子量30.03、沸点 $-19.5^\circ\text{C}$ 、融点 $-92^\circ\text{C}$ 、引火点 $83^\circ\text{C}$ (closed cup)、発火点 $430^\circ\text{C}$ 、爆発限界7-73vol%、蒸気圧517kPa( $25^\circ\text{C}$ )の強い刺激臭のある揮発性有機化合物で、常温では無色の気体である。水に溶けやすい性質をもち、37%水溶液は通常ホルマリンとよばれている。合成樹脂や接着剤の原料、繊維製品の表面処理、防腐剤、消毒薬などに利用されている。曝露源として自動車排気ガス、建材、カーペット、塗料、食物、調理およびたばこの煙などがあげられるほか、死体防腐処理者、病理学者、ホルムアルデヒド製造、樹脂・プラスチック製造業従事者などでは職業性曝露が問題となる。2002年度の環境汚染物質排出移動登録(PRTR)によれば、約29,000tが環境中に排出されたという。

IPCSは、一般のヒトに対して鼻、喉への刺激がみられる濃度を、 $0.1\text{--}3.1\text{mg}/\text{m}^3$ の間にあると推定している。また2001年に欧州大気ガイドライン第2版を発表したWHO欧州地域専門家委員会は、IPCSが報告した一般の健康なヒトが上気道に刺激を感じる最低濃度 $0.1\text{mg}/\text{m}^3$ に基づいて、ホルムアルデヒドの室内濃度指針値を「30分平均値で $0.1\text{mg}/\text{m}^3$ 以下」とした。また、厚生労働省は、職域での室内環境基準を0.08ppm以下、特定作業領域でも0.25ppm以下に保つよう、2002年の職域における屋内空气中のホルムアルデヒド濃度低減のためのガイドラインで規定している。産業衛生学会でも2007年度の許容濃度等の勧告において、許容濃度を0.1ppmと提案している。

今回は、ホルムアルデヒドの許容濃度の新たな提案理由について説明して頂くとともに、医学部の解剖実習における学生のホルムアルデヒド曝露と健康影響の調査結果と、工学的対策等について検討することを企画いたしました。ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようお願いいたします。

日時：平成19年11月2日（金） 14:00から17:00

場所：慶應義塾大学医学部 予防校舎3階 講堂（地図、参照）

定員：100名

参加費：1000円（資料代として）

参加申し込み：（学会員以外でも参加できます。当日参加も可能ですが、座席を用意したいため、参加希望者は前もってご連絡頂ければ幸いです。） 連絡先：田中茂(stanaka@jumonji-u.ac.jp TEL 048-477-0555)

### テーマ：解剖実習におけるホルムアルデヒド対策を考える

座長：野見山哲生（信州大医学部）

講演者

14:00～15:00

ホルムアルデヒドの許容濃度の提案理由について：大里 厚（セイコーエプソン（株）日野事業所産業医）

15:00から15:30

解剖実習における学生のホルムアルデヒド曝露と健康影響に関する調査：岩澤聡子（慶應大学医学部）

15:30から16:00

解剖実習室におけるプッシュプル型換気装置による工学的対策について：上福元清隆（興研労働衛生コンサルタント事務所）

16:00から16:30

ホルムアルデヒドに対する防毒マスクについて：田中 茂（十文字学園女子大人間生活学部）

16:30～17:00

質疑応答&ディスカッション

以上

慶應義塾大学医学部 予防校舎3階 講堂  
 住所：東京都新宿区信濃町35  
 電話番号：03-5363-3758 (担当：岩澤聡子)

